

せわやがトカラ情報

十島村教育委員会
〒892-0822 鹿児島市泉町13番13号
TEL 099-227-9771

南北160km 「心をつなぎ気概に満ちた」十島の教育

11月・・・十島村国民文化祭

十島村教育長 有村 孝一

10月31日から11月15日まで16日間「第30回国国民文化祭・かごしま2015」が開催されました。総合開会式には、県の要請により悪石島のボゼが参加しました。十島村では、11月3日に鹿児島市会場と、11月15日に十島村各島会場で、2日間開催いたしました。鹿児島市会場のジェイドガーデンパレスには、約500名の皆さんが集まってくださいました。各島から集まった約100名の出演者は、朝早くからリハーサルをして、午後の本番に備えました。本番の4時間余りがあったという間に過ぎました。

他県からは、秋田県にかほ市の「御宝頭の舞（獅子舞）」と熊本県の「肥後ちょんかけ独楽」の特別出演がありました。どちらも初めて観るもので、大変興味あるものであります。



宝島のスチールドラムは大変澄んだ音で、開閉会式をしまりあるものにしてくれました。子どもたちも良く頑張りました。

小宝島の「トカラ観音主」「島子おはら」は、三味線ときれいな歌声との調和がとても気持ちよかったです。やはり小宝島は宝島とともにあったということが分かりました。

口之島の「先踊り」と「狂言」は、口伝だけで伝えられたもので、何かこの会場が戦国時代にタイムスリップしたかのような感覚になりました。武士の心意気が今もなお受け継がれていることに感動しました。



中之島の「盆踊り」は、「静」の踊りと言われるだけに、勇壮な激しさはありませんが、中世風の匂いが強く漂っており、「動」の口之島との違いが出ておもしろかったです。

平島の「祝歌」には、平家の名残が色濃く感じられ、先人たちの伝承する熱意に感銘を覚えました。

最後に悪石島の「盆踊り」です。やはりなんといっても盆踊りの後で出現するボゼは強烈でした。トカラを代表する民俗文化であります。今回は、居ながらにしてすべての島の伝統芸能を観ることができるという素晴らしいものでした。



また十島村会場では、それぞれの島の特徴ある出しものを披露していただきました。列島マラソンに参加していた

方々も大変感動しておられました。この国民文化祭を通して、同じ十島村でも島によって違う文化、すなわち黒潮が運ぶ交流の波が違いを生み、そして黒潮の流れが大きく鹿児島島の文化を育んだということが分かったような気がしました。



「十島のうた」の3番の歌詞に「島の文化の朝が来る」とあります。改めて、この国民文化祭が十島村の文化のさらなる発展のきっかけになることを期待したいものです。

シリーズ——島で暮らす
十島村の学校で生活して
「楽しい中之島での生活」
平島小学校4年 中村亮輔

一学年4クラスの大きな学校から、全校児童10人もいないとても小さな平島小学校にきました。はじめは、引越しも始めてで、なれない場所での生活に少し不安を感じていました。でも、島の行事がたくさんあって、いろいろな人とすぐ知り合いになりました。特に、島一周魚とりという行事では、初めて漁船に乗り、島のことを教えてもらったり、海上から島をながめると、いつもとちがうながめで、とても感動しました。他にも、トビウオすくいを教えてもらったり、ハイイロオウチュウというめずらしい鳥を見せてもらいました。町とは違う自然豊かな平島です。でも、一番は、いろんな学年の友だちと遊ぶことが楽しいです。カセグウチという行事で、顔にすみをぬられて泣いたことも、今では心に残る思い出です。

あっという間に、毎日が過ぎていきます。すごく早いなあと思います。これからも、みんなでがんばりたいし、楽しみたいです。

シリーズ——南日本新聞「南風録」から
平成27年11月21日（土）掲載

トカラ列島最南端の宝島で一昨年から昨年にかけて、ベビーブームがあったそう。宝島中学校の学校新聞「メイメイ」で知った。もちろん人間の赤ちゃんの話だ。小さな島ながらも、の“ブーム”だが、活気づく島の様子がかがえた。◆特集「ママさん座談会」は、食材を船便に頼るゆえの離乳食づくりの苦勞、病院がない不安などを伝えてくれる。そこで終わらず「子どもを見てくれる人が多い。」「島の自然とふれ

あいながら遊んでいる。」と地元への愛着や誇りをにじませている。63回を数える学校新聞コンクールは、今年も秀作ぞろいだった。中でも離島の学校新聞は本土とひと味違う発想や視点にあふれ読み応えがある。口之島小中の新聞「タモトユリ」には、島外に進学する卒業生が、「本当は島を離れたくない」とつぶっていた。小さな学校でともに育ち、大好きな先輩を見送る在校生のコメントもエールと寂しさが入り交じる。離島ならではの光景が頭に浮かぶ。風水害や交通基盤、育児・進学環境といった本土との比較だけを通して、島の生活を不便と捉えがちな。学校新聞を手にし、不便を当たり前のように受け止め、伸び伸びと過ごす子どもたちの姿をたくましく思った。農作業体験や数々の名所巡り、豊かな自然と支え合う人々の暮らしが紙面を彩る。学校新聞と侮るなかれ。地域の魅力を伝える立派な情報発信ツールだ。

輝 第30回国国民文化祭・かごしま
2015「トカラの伝統芸能祭」
11月3日（火）ジェイドガーデンパレス
11月14日（土）15日（日）十島村各港岸壁

11月3日は、午前11時30分の宝島のスチールドラムに始まり、12時には肥後村長のあいさつ、そして県外の2団体の披露が終わると小宝島の「トカラ観音主」「島子おはら」口之島の「先踊り」「狂言」、中之島の「盆踊り」、平島【祝歌】、悪石島の「盆踊り」、最後に有村教育長のあいさつで閉幕しました。500人近くの観客は、宝島のスチールドラム演奏に見送られながら十島村独特の踊りや唄に大いに感銘を受けているようでした。11月14日、15日はトカラ列島島めぐりマラソン大会と併行して各島港の岸壁でトカラの伝統芸能が披露されました。宝島では、14日の交流会でスチールドラムの演奏、小宝島では小・中学生による「小宝魂」「ソーラン節」悪石島では小・中学生による「悪石ソーラン」、平島では小・中学生による「平島太鼓」、諏訪之瀬島では



小・中学生による吹奏楽の演奏、中之島では小・中学生による御岳太鼓、女性の会による踊り「十島のうた」、最後の口之島では小・中学生による「エイサー」が披露され、列島マラソンのランナーや岸壁に集まった島民を大いに魅了しました。鹿児島市会場では、出演者も合わせて579人、十島村会場では、述べ1,413人を動員したことになり「トカラの伝統芸能祭」は、合わせて1,992人という大人数を集めて大成功に終わりました。出演された方々、応援していただいた島民の皆様、本当にありがとうございました。

十島村の小・中学校からメッセージ

平島中学校諏訪之瀬島分校教諭 池田 伸吾

前任校の校長先生から次の赴任地が「諏訪之瀬島」と告げられたとき「えっあの諏訪之瀬島!？」と驚いたのをつい昨日の事のように思い出します。十数年前に新規採用教員として赴いた初任地で、教科の指導教官として大変お世話になった先生が、新任教頭として赴任されたのがこの諏訪之瀬島でした。そして同じ年にその初任校に新しく来られた教頭先生が諏訪之瀬島からでした。その教頭先生から、諏訪之瀬島での生活や学校の様子をうかがい、そのきれいな風景を想像し、いつか行ってみたいと考えていました。それが何という因縁でしょうか。その諏訪之瀬島に赴任することになったのです。着任に際して心に決めてきたことは「自分のできることは精一杯やろう。新しいことに挑戦しよう。」でした。専門教科は英語ですが、極小規模校での指導はどうすればいいのだろうと初めは不安も大きかったです。しかし、現在では少人数の利点を生かして、細かい指導とより多くの英語を使える授業づくりに努めようと前向きに取り組んでいます。専門外である技術や美術などこれまで教えた経験のない教科指導は、四苦八苦しながら生徒たちとともに学ぶ新しい自分との出会いにもなっています。

また、諏訪之瀬島での生活は、島民の皆さんに大変お世話になっています。学校行事への積極的な参加をはじめ、地域の子どもたちと同様に、わたしたち職員も温かく見守ってくださいます。時には、魚のお裾分けや食事への誘いも受け、感謝の絶えない毎日を送っています。諏訪之瀬島の豊かな自然とあたたかな教育環境を生かして、子どもたちの成長のために日々邁進していきたいと思っています。

教師仲間である「あなた」への私からのメッセージ
十島村では不便さは感じて、不自由を感じることはありません。自分の取り組みたい教育についてじっくり考えるにはとてもいい環境です。また、小・中学校の連携も非常に勉強になります。自分自身のこれまでの教育観を振り返るいい機会になると思います。